

農林水産省補助事業

動物用ワクチン利用の手引き
(豚用ワクチン編)
(第3 豚用ワクチン改訂版)

令和3年3月

動物用ワクチン等保管協議会

目 次

改訂版について	i
第3 豚用ワクチン	1
1 ワクチン一覧の解説（利用にあたって） . . .	1
2 ワクチン一覧	5
2-1 ウイルスワクチン	5
2-2 細菌等ワクチン	16
2-3 ウイルス・細菌の混合ワクチン	30
表 ワクチン一覧におけるワクチンと含有する ウイルス・細菌の名称一覧	35

改訂版について

「動物用ワクチン利用の手引き（豚用ワクチン編）」については、平成 31 年 3 月に発刊した「同（豚用ウイルスワクチン編）」に細菌等ワクチン（トキソイドを含む。）を追加収載し、「第 1 豚の感染症とその予防」、「第 2 生ワクチン及び不活化ワクチンの特徴等」及び「第 3 豚用ワクチン（「1 ワクチン一覧の解説（利用にあたって）」、「2 ワクチン一覧」及び「表 ワクチン一覧におけるワクチンと含有するウイルス・細菌の名称一覧」の構成で令和 2 年 3 月に発刊しました（収載製剤数 48、品目数 64）。

今般、このうちの「第 3 豚用ワクチン」の「2 ワクチン一覧」について、発刊後の新たに製造販売承認を取得した品目の追加、既収載品目での有用な情報の追加、製造販売中止による品目の削除及びこれらに伴う関連項目の修正等整備を行い、「第 3 豚用ワクチン改訂版」として発刊したものです（収載製剤数 48、品目数 61）。主な修正（変更）内容は、別紙のとおりです。

引続き、本手引きを適切な飼養衛生管理のため地域、飼育場（農家）ごとの感染症対策における衛生管理プログラム作成の一助としてご活用願います。

最後に、本手引きは、令和 2 年度動物用ワクチン等保管事業（農林水産省補助事業）において作成されたものです。

(別紙)

主な修正（変更）内容

第3 豚用ワクチン

1 ワクチン一覧の解説（利用にあたって）

- (1) 使用上の注意（抜粋）における使用制限期間に関する記載の整備を図ったこと（p 3）
- (2) 改訂に伴う関連項目の記載を整備したこと（p 1）

2 ワクチン一覧

- (1) 「フォステラメタスティムPCV」（p 8）、「スワインテクトPRRS-ME」（p 12）及び「フォステラメタスティムPCV-MH」（p 30）の3品目を新規に収載したと
- (2) 「“京都微研, 日本脳炎ワクチン・K」の接種プログラム欄に免疫持続期間に関する記載を追加したこと（p 6）
- (3) 「スバキシノーエスキーフォルテME」、「フォステラPCV」、「豚伝染性胃腸炎生ウイルス予防液」、「豚丹毒生ワクチン-KB」、「レスピフェンドMH及び「日生研AR混合ワクチンBP」の6品目を削除したこと

3 表 ワクチン一覧におけるワクチンと含有するウイルス・細菌の名称一覧

ワクチン一覧での品目の追加、削除に伴い修正したこと（p 35）

第3 豚用ワクチン

1 ワクチン一覧の解説（利用にあたって）

（1）目的・全体概要

本一覧は、獣医師等の家畜衛生関係者が畜産農家のワクチン使用に際して利用するために、個々のワクチンごとに製造販売承認申請書（以下「承認申請書」という。）、添付文書、その他の情報をもとに一覧表として整備したものである。掲載しているワクチンは、令和2年12月末時点で製造販売されている豚用のワクチン48製剤、61品目について、ウイルスワクチン、細菌等ワクチン及びウイルス・細菌の混合ワクチンに区分して、それぞれ有効成分数ごとに取りまとめた。

なお、ワクチン61品目と含有するウイルス・細菌の名称との関係を表として取りまとめた。

（2）法的規制

掲載しているすべてのワクチンの医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律（以下「法」という。）による取扱い等の規制は、それぞれ法第83条第1項の規定により読み替えた第44条第2項、第49条第1項及び第36条の8第1項に基づく「劇薬」、「要指示医薬品」及び「指定医薬品」である。

（3）一覧表解説

ア 製品名

承認申請書及び添付文書（以下「承認申請書等」という。）における品名を記載した。

イ 製造販売業者名

略称で記載したが、正式名称は下表のとおりである。

略称	正式名称
MSDAH	MSD アニマルヘルス株式会社
科飼研	株式会社科学飼料研究所
共立	共立製薬株式会社
KMB	KMバイオロジクス株式会社
セバ	セバ・ジャパン株式会社
ゾエティス	ゾエティス・ジャパン株式会社
日生研	日生研株式会社
京都微研	株式会社 微生物化学研究所

ベーリンガー	ベーリンガーインゲルハイムアニマルヘルスジャパン株式会社
松研	松研薬品工業株式会社

ウ 有効成分名

承認申請書等における有効成分としてのウイルス、細菌名（血清型、抗原型等を含む。）とし、細菌が産生する毒素等が本質の場合には、名称及びその種類を記載した。遺伝子組換え技術を応用した場合については、「組換え型」と記載を付した。

株名については、原則、省略したが、他のワクチンの接種プログラムで特定の株名のワクチン投与が規定されている場合には記載した（日生研日本脳炎生ワクチン、“京都微研”、日本脳炎ワクチン、日本脳炎・豚パルボ混合生ワクチン「KMB」、 “京都微研”、日本脳炎・豚パルボ混合生ワクチン及び “京都微研”、豚死産3種混合生ワクチン）。

また、生・不活化の別及びアジュバントを含有する製剤にあつては、それぞれ（ ）内にその旨を記載した。「生」については、弱毒である。

エ 用法・用量及び効能・効果

品目ごとに承認申請書等での記載を原則そのまま記載した。ただし、品目が複数である製剤であつては、品目ごとに表現は異なるが、その内容が同等と判断した場合には、記載の統一を図った。また、用法・用量においては、用法が注射の製剤にあつては「注射」、それ以外の製品にあつては、「投与」と整理し、記載した（接種プログラム及び使用上の注意（抜粋）においても同じ）。さらに、豚以外の動物も対象となっている動物用日脳TCワクチン「KMB」、日生研日本脳炎TC不活化ワクチン、“京都微研”、日本脳炎ワクチン・K及び破傷風トキソイド「日生研」に関しては、豚のみに限定した記載とした。

オ 接種プログラム

製造販売業者による添付文書、パンフレット（「豚用ワクチンと診断液のご案内」（2001年 社団法人動物用生物学的製剤協会編）を含む。）に掲載されている接種プログラムに関する内容を再検討し、これらの記載内容に基づき用法・用量とともに図（以下参照）及び文章の形式として整理した。図中においては、投与対象日齢等に限定がある場合には、その旨を記載した。また、文章においては、添付文書等をもとに疾病の発生時期、免疫持続等の有効性に関する情報について記載した。

上段：投与量	2mL	2mL	2mL
	— I —	— I —	— I —
下段：投与時期	3～5週間隔		半年～1年毎

カ 使用上の注意（抜粋）

製品の添付文書における使用上の注意のうち、家畜衛生上（微生物の伝播の防止、免疫賦与、禁忌等）及び公衆衛生上（使用制限期間（と畜場への出荷の制限期間）（注））の観点からの重要事項、使用制限、副反応に関する事項、使用者への注意等を抜粋し、記載した。なお、全体に共通する事項については、以下に記載した。

- ・注射器具（注射針）は、原則として1頭ごとに取り替えること
- ・移行抗体価の高い個体では、ワクチン効果が抑制されることがあるので、幼若な豚への投与は移行抗体が消失する時期を考慮すること（生ワクチン）
- ・2回注射による免疫を行う場合には、2回目の注射は、1回目と異なる部位に行うこと

（注）使用制限期間に関する記載（「本剤はと畜場出荷前〇〇日（週）間は使用しないこと。」）のない製剤にあつては、厚生労働省は、と畜場法施行規則の運用に当たり、生物学的製剤注射後20日以内の獣畜のと畜検査申請を受け付けない又は申請が行われないよう都道府県を指導している。

キ 参考情報

使用に際して、有効性の担保にとって有用な製品の特徴等を記載した。

（４）その他

接種プログラム等についてさらに詳細が必要な場合には、各製造販売業者にお問い合わせ願います。

「使用上の注意」を含む添付文書については、各製品の添付文書又は各製造販売業者のHP並びに農林水産省動物医薬品検査所HP（動物用医薬品（体外診断用医薬品を含む）添付文書等ダウンロードページ

<http://www.maff.go.jp/nval/tenpubunsyoyiyakuhin.html>）をご覧ください。

2 ワクチン一覧

2-1 ウイルスワクチン

(1) 1 成分の製剤

一連番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意（抜粋）	参考情報
1	日生研 日本脳炎生ワクチン	日生研	日本脳炎ウイルス at 株（生）	乾燥ワクチンに添付の溶解用液に加えて溶解し、その 1 mL を豚の皮下に注射する。	豚の日本脳炎の予防及び日本脳炎ウイルスによる死産の予防	1 mL └───┘ 1 mL └───┘ 1 月間隔 4 か月齢未満 4 か月齢未満の子豚には 1 か月間隔で 2 回皮下注射することが望ましい。 日本脳炎ウイルスの汚染期前に免疫を付与するため、本剤は通常 4 月から 6 月にかけて注射する（本病の原因ウイルスを媒介する吸血昆虫の活動時期は地域により異なるので注意する。）。 繁殖豚では 1 年ごとに再注射する。	本剤に含有されるウイルスは人獣共通感染症の病原体であるので、使用時には十分注意すること。	
	“京都微研” 日本脳炎ワクチン	京都微研	日本脳炎ウイルス m 株（生）	乾燥ワクチンに添付の溶解用液を加えて溶解し、1 mL を頸側部皮下に注射する。	豚の日本脳炎感染の予防、繁殖用母豚にあっては日本脳炎感染に起因する死産予防	1 mL └───┘		

一連 番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
2	動物用日脳T C ワクチン「KM B」	KMB	日本脳炎ウイルス (不活化)	弱毒日本脳炎ウイ ルスm株で免疫し た豚に1か月後2 mLを皮下に注射す る。 前年度にワクチン 歴を有する豚には 2mLを皮下に注射 する。	日本脳炎ウイルス による豚の死産の 予防	1mL(※) └──┬── 1 月間隔 2mL └──┬── (前年度にワクチン歴を有する豚) 2mL └──┬──		
	日生研日本脳炎 T C不活化ワク チン	日生研		日本脳炎生ワクチ ンat株で免疫し た豚に1か月後2 mLを皮下注射す る。 前年度にワクチン 歴を有する豚には 2mLを皮下注射す る。		1mL(※) └──┬── 1 月間隔 2mL └──┬── ※：日本脳炎生ウイルスat株を有効成分とする 生ワクチン (前年度にワクチン歴を有する豚) 2mL └──┬── 日本脳炎ウイルスの汚染期前に免疫を付与する ために、本剤は通常4月から6月にかけて注射 する(本病の原因ウイルスを媒介する吸血昆虫 の活動時期は地域により異なるので注意する。)		
3	“京都微研” 日本脳炎ワクチ ン・K	京都微研	日本脳炎ウイルス (不活化)(アジュ バント)	(1) 日本脳炎生 ワクチンとの併用 注射法 第1回 “京都微研” 日本 脳炎ワクチン 1 ドース (mL) 皮下注射 第2回 “京都微研” 日本 脳炎ワクチン・K 2mL 皮下注射 第1回と第2回の 注射間隔は約1か 月とする。 (2) 前年度に“京 都微研” 日本脳炎 ワクチンを注射し た豚では2mLを皮 下注射する。	豚の日本脳炎ウイ ルス感染による死 産の予防	1mL(※) └──┬── 約1 月間隔 2mL └──┬── ※：日本脳炎ウイルスm株を有効成分とする生 ワクチン “京都微研” 日本脳炎ワクチン注射後に、本剤を 追加注射し、経時的に赤血球凝集抑制抗体価を 測定した結果、本剤による追加免疫効果が認め られ、6か月後まで有効抗体価以上の抗体価を 保持することが確認されている。 (前年度に※を注射した豚の場合) 2mL └──┬──		

一連 番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
6	フォステラ メ タステイムPC V	ゾエテイス	豚サークコウイルス (1型-2型キメラ) (不活化) (ア ジュバント)	本剤 2mL を 3 週 齢以上の豚の頸部 筋肉内に注射す る。	豚サークコウイルス 2 型感染に起因す る増体量抑制の軽 減、並びにウイル ス血症及びウイル ス排泄の低減	2mL ├───┐ 3週齢以上	- 繁殖に供している雌豚に は注射しないこと。 - 注射部位を厳守すること。	
7	インゲルバック サーコフレック ス	ベーリンガー	豚サークコウイルス (2型・組換え型) (不活化) (アジュ バント)	3 週齢～5 週齢の 子豚に 1 頭当たり 1 mL を 1 回 頸 部 筋肉内に注射す る。	豚サークコウイルス 2 型感染に起因す る死亡率の改善、 発育不良豚の発生 率の低減、増体量 の低下の改善、臨 床症状の改善及び ウイルス血症発生 率の低減	1mL ├───┐ 3～5週齢	- アナフィラキシー反応が 起こった場合は、エピネフ リン投与が推奨される。 - 注射部位を厳守すること。	
8	ポーシリス PCV	MSDAH	豚サークコウイルス (2型・組換え型) (不活化) (アジュ バント)	3 週齢から 9 週齢 の豚にワクチンの 2 mL を 1 回、頸 側部筋肉内に注射 する。ただし、豚 サークコウイルス 2 型の感染時期が早 期な場合、又は、 母豚からの移行抗 体の保有レベルに ばらつきが認めら れる場合には、3 日齢以上の豚にワ クチンの 2 mL を 3 週間隔で 2 回注 射すること。	豚サークコウイルス 2 型感染に起因す る死亡率の改善及 び増体量の低下の 改善 (豚サークコウイルス 2 型の感染時期が早期な場 合、又は、母豚からの移行抗体の保有レベルに ばらつきが認められる場合)	2mL ├───┐ 3～9週齢 2mL ├───┐ 3週間隔 3日齢以上 3 週齢注射で 28 週齢まで免疫が持続することが 確認されている。	- 本剤は、と畜場出荷前 5 週間は使用しないこと。 - 妊娠中の繁殖用雌豚には 注射しないこと。 - 注射部位を厳守すること。	

一連 番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
9	サーコバック	セバ	豚サーコウイルス (2型) (不活化) (アジュバント)	抗原液及びアジュバントの各バイアルをそれぞれよく振盪した後、抗原液全量をアジュバントバイアルに注入し、泡立てない程度にゆつくり10回程度転倒混和し、下記の量を豚の耳根部後方の頸部筋肉内に注射する。 3週齢以上の豚に0.5mLを1回注射する。ただし、繁殖雌豚に対しては以下の方法で免疫を行う。 1. 初回免疫 1. 1母豚候補豚1回2mLを交配前3～4週間隔で2回、さらに分娩前に1回の計3回注射する。ただし、2回目の注射は交配予定日の3～4週間前、3回目の注射は分娩予定日の2～4週間前に行う。 1. 2産歴のある妊娠豚1回2mLを3～4週間隔で2回注射する。ただし、2回目の注射は分娩予定日の2～4週間前に行う。 2. 次回以降の免疫 (初回免疫豚の次回妊娠時以降の免疫) 1回2mLを、分娩予定日の2～4週間前に1回注射する。	1. 豚への注射における効能又は効果 豚への注射後の能動免疫による豚サーコウイルス2型 (PCV2) 感染に伴う死亡率の改善、発育不良豚発生率の低減、増体量低下の改善、リンパ組織病変の軽減、臨床症状の改善、ウイルス血症及びウイルス排泄の低減 2. 繁殖雌豚への注射における効能又は効果 繁殖雌豚への注射後の能動免疫によるPCV2感染による産子数や離乳頭数の減少の軽減、ならびに子豚における受動免疫によるPCV2感染に伴うリンパ組織における病変の軽減、PCV2に起因する斃死率及び臨床症状 (斃死、発育不良及びリンパ節の腫脹) の軽減	0.5mL 3週齢以上 1 初回免疫 母豚 2mL 2mL 2mL 3～4週間隔 3～4週間隔 2～4週間隔 交配 予定日 分娩 予定日 産歴のある妊娠豚 2mL 2mL 3～4週間隔 2～4週間隔 分娩 予定日 分娩 予定日 2 次回以降の免疫 (初回免疫豚と次回妊娠時以降の免疫) 2mL 2～4週間前 分娩 予定日	・本剤は対象豚によって注射量が異なる (0.5mL又は2mL) ので注意すること。 ・本剤を繁殖雌豚に注射して子豚の受動免疫を期待する場合 (2mL/頭) は、子豚が免疫母豚の乳汁を飲むことによって予防効果が十分発揮される。免疫母豚が十分な乳汁を分泌していることを確認するとともに、子豚が乳汁 (初乳) を十分に飲むようにすること。それには豚への能動免疫 (0.5mL/頭) を実施すること。 ・注射部位を厳守すること。	

一連 番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
10	豚パルボ生ワクチン「KMB」	KMB	豚パルボウイルス (生)	乾燥ワクチンに添付の溶解用液を加えて溶解し、その1 mL を豚の皮下に注射する。	豚パルボウイルス感染症の予防	1mL  抗体陰性の約4か月齢の豚に注射したとき、注射1か月後にHI抗体が陽転し、少なくとも注射後約12か月間は持続することが確認されている。		
11	豚パルボワクチン「KMB」 “京都微研”豚パルボワクチン・K	KMB 京都微研	豚パルボウイルス (不活化)	繁殖豚に2mLを、1～4週間隔で2回、皮下に注射する。	豚パルボウイルスによる死産の予防	2mL 		

一連 番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意（抜粋）	参考情報
12	フォステラ PRRS	ゾエティイス	豚繁殖・呼吸障害 症候群ウイルス (生)	乾燥ワクチンに添 付の溶解用液を加 えて溶解し、その 2 mL を 1 日 齢 以 上の豚の筋肉内に 注射する。	豚繁殖・呼吸障害 症候群ウイルス感 染による呼吸器症 状の軽減、肺病変 の軽減及びウイル ス血症の予防	2mL ├── 1日齢以上 本剤を 1 日 齢 の 子 豚 に 注 射 し た 結 果、 投 与 後 26 週 まで 免 疫 が 持 続 す る こ と が 確 認 さ れ て い る。	・繁殖用雄豚には注射しないこと。 ・本剤を幼若な豚に注射する場合、母子免疫の影響を受けてワクチン効果は抑制されることがある。 ・野外ウイルスが体内で増殖している豚にワクチン注射をした場合、ワクチン株と野外ウイルスの組換えが起こる可能性が否定できない。 ・対象となる健康な子豚全頭に一斉に注射すること。 ・PRRS 陰性農場では使用しないこと。 ・PRRS 汚染農場に PRRS 陰性豚を導入する際にワクチン陰性豚を注射する場合、ワクチン株が繁殖用豚へ伝播する機会を減少させるために、ワクチンを注射した豚を注射後 6 週間は繁殖用豚から隔離して飼育すること。 ・ワクチンウイルスは注射豚から排泄され水平感染する可能性がある。妊娠中の雌豚及び繁殖用種雄豚へワクチンウイルスが伝播しないよう注射豚（群）の飼育管理には注意すること。	
	インゲルバック PRRS生ワクチン	ベーリンガー		乾燥ワクチンに添 付の溶解用液を加 えて溶解し、その 2 mL を 3 ～ 18 週 齢の豚の筋肉内に 注射する。繁殖用 雌豚に対してはそ の 2 mL を 交 配 3 ～ 4 週 間 前 に 筋 肉 内に注射する。	豚繁殖・呼吸障害 症候群ウイルス感 染による子豚の生 産阻害の軽減及び 繁殖用雌豚の繁殖 成績の改善	2mL ├── 3～18週齢 繁殖用雌豚 ├── 2mL 3～4週間前 └── 交配	・妊娠中の繁殖用雌豚及び繁殖用雄豚には注射しないこと。 ・本剤を幼若な豚に注射する場合、母子免疫の影響を受けてワクチン効果は抑制されることがある。 ・野外ウイルスが体内で増殖している豚にワクチン注射をした場合、ワクチン株と野外ウイルスの組換えが起こる可能性が否定できない。 ・対象となる健康な子豚全頭に一斉に注射すること。 ・PRRS 陰性農場では使用しないこと。 ・PRRS 汚染農場に PRRS 陰性豚を導入する際にワクチン陰性豚を注射する場合、ワクチン株が繁殖用豚へ伝播する機会を減少させるために、ワクチンを注射した豚を注射後 6 週間は繁殖用豚から隔離して飼育すること。 ・ワクチンウイルスは注射豚から排泄され水平感染する可能性がある。妊娠中の雌豚及び繁殖用種雄豚へワクチンウイルスが伝播しないよう注射豚（群）の飼育管理には注意すること。	

一連 番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意（抜粋）	参考情報
13	スワインデクト PRRS-ME	日生研	豚繁殖・呼吸障害 症候群ウイルス (不活化) (アジュ バント)	3 週齢以上の豚に 3 ～ 5 週間隔で 1 回 1 mL ずつを 2 回、筋肉内に注射 する。	豚繁殖・呼吸障害 症候群ウイルス感 染によるウイルス 血症期間の短縮又 は軽減	約 4 週齢の豚に用法及び用量どおりにワクチン を注射したところ、2 週後に ELISA 抗体価は良 好に上昇し、強毒株を用いた実験感染試験では ウイルス血症期間の短縮並びに軽減効果が認め られた。また、ウイルス血症期間の短縮効果は 2 回目注射後、少なくとも約 4 か月間は持続する ことが確認されている。	・本剤は妊娠豚には注射し ないこと。	
14	日生研 PED 生 ワクチン	日生研	豚流行性下痢ウイ ルス (生)	乾燥ワクチンに添 付の溶解用液を加 えて溶解し、その 2 mL ずつを 2 ～ 8 週間の間隔で妊 娠豚の筋肉内に 2 回注射する。2 回 目の注射は分娩予 定の約 2 週間前と する。	母豚を免疫し、そ の乳汁を哺乳させ ることによる子豚 の豚流行性下痢発 症の阻止又は軽減		・本剤の注射時には、生後 7 日齢未満の幼若豚は、注 射対象豚から隔離するこ と。 ・本剤は妊娠豚に注射し、 子豚が免疫母豚の初乳及び 常乳を飲むことで予防効果 が発揮される。免疫母豚が 十分量の乳を分泌している かどうか、また、子豚が乳 を十分に飲んでいるかどう かを確認すること。	

(2) 2成分の製剤

一連 番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
15	“京都微研,” 豚インフルエン ザワクチン	京都微研	豚インフルエンザ ウイルスA型(2 株)(不活化)(ア ジュバント)	豚の頸部皮下また は筋肉内に2mL ずつを3週間隔で 2回注射する。	豚インフルエンザ の予防			
16	日本脳炎・豚パ ルボ混合生ワク チン「KMB」 “京都微研,” 日本脳炎・豚パ ルボ混合生ワク チン	KMB 京都微研	日本脳炎ウイルス m株・豚パルボウ イルス(いずれも 生)	乾燥ワクチンに添 付の溶解用液を加 えて溶解し、その 1mLを豚の皮下 に注射する。	豚の日本脳炎及び 豚パルボウイルス 感染症の予防。特 に繁殖用母豚につ いては、日本脳炎 ウイルス及び豚パ ルボウイルス感染 による死産予防。		・本剤に含有される日本脳炎ウイルスは人獣共通感染症の病原体であるので、使用時には十分注意すること。	

一連 番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
17	スライムジェン TGE / PED	KMB	豚伝染性胃腸炎ウイルス・豚流行性下痢ウイルス (いずれも生)	乾燥ワクチンに添付の溶解用液を加えて溶解し、その2 mL を妊娠豚の筋肉内に約3週間隔で2回注射する。第2回目注射は、分娩予定日の約2週間前とする。	乳汁免疫による子豚の豚伝染性胃腸炎の予防及び豚流行性下痢の発症軽減	妊娠豚 2mL — 3週間隔 約2週間前 分娩予定日 2mL — 2mL — 分娩予定日	・15日齢未満の子豚がいる豚舎 (分娩舎) では使用しないこと。 ・本剤は豚舎内に飛散させないよう注意し、もし飛散した場合は、直ちに消毒すること。 ・本剤は、妊娠豚に注射し、子豚が免疫母豚の乳汁を常に飲むことによって予防効果が発揮される。免疫母豚が十分量の乳汁を分泌しているかどうか、また乳汁を飲んでいない子豚がいないかどうか確認すること。	
	日生研TGE・PED混合生ワクチン	日生研		乾燥ワクチンに添付の溶解用液を加えて溶解し、その2 mL を4ないし8週間の間隔で妊娠豚の筋肉内に2回注射する。第2回目注射は、分娩予定日の約2週間前とする。	乳汁免疫による子豚の豚伝染性胃腸炎の軽減及び豚流行性下痢の発症の阻止若しくは軽減	妊娠豚 2mL — 4～8週間隔 約2週間前 分娩予定日 2mL — 2mL — 分娩予定日	・種付3～4週間後に再発情のないことを確認し、第1回目の注射をすること。 ・本剤の注射時には、生後7日齢未満の幼若豚は、注射対象豚から隔離すること。 ・本剤は、妊娠豚に注射し、子豚が免疫母豚の初乳及び常乳を飲むことで予防効果が発揮される。免疫母豚が十分量の乳汁を分泌しているかどうか、また乳汁を飲んでいない子豚がいないかどうか確認すること。	

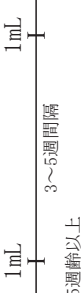
(3) 3 成分の製剤

一連 番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
18	“京都微研” 豚死産 3 種混合 生ワクチン	京都微研	日本脳炎ウイルス m 株・豚パルボウ イルス・豚ゲタウ イルス (いずれも 生)	乾燥ワクチンに添 付の溶解用液を加 えて溶解し、その 1 ml を種付け前 の繁殖用雌豚の皮 下に注射する。	豚の日本脳炎、豚 パルボ及び豚のゲ タウイルス感染症 の予防。特に繁殖 用母豚の日本脳炎 ウイルス、豚パル ボウイルス及びゲ タウイルス感染に よる異常産予防	 1mL — — 種付け (交配)	本剤に含有される日本脳炎ウイルスは人獣共通感染症の病原体であるので、使用時には十分注意すること。	

2-2 細菌等ワクチン

(1) 1 成分の製剤

一連番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意（抜粋）	参考情報
1	豚丹毒生ワクチン「科飼研」 日生研豚丹毒生ワクチンC 豚丹毒生ワクチン「KMB」	科飼研 日生研 松研 (販売はKM B)	豚丹毒菌（生）	乾燥ワクチンに添付の溶解用液を加えて溶解し、1 mL を豚の皮下に注射する。	豚丹毒の予防	 参考：標準的には以下の方法が推奨されます。 1 子豚では母豚からの移行抗体を考慮して1～2か月齢時に初回注射し、善感反応がみられない場合には3か月齢時に再注射する。 2 繁殖雌補豚及び繁殖豚では、6か月間隔で補強注射する。	・本剤のワクチン株は薬剤の影響を受けやすいので、本剤注射前3日間から注射後7日間は無菌の飼料を及ぼすような薬剤の投与又は飼料への添加は避けること。 ・本剤に含有される豚丹毒菌は人獣共通感染症の病原体であるので、使用時には十分注意すること。 ・豚丹毒菌は、人に対して創傷部を中心とした紅斑、腫脹、リンパ節炎、敗血症、心内膜炎等の症状を示すことがある。 ・本剤注射後2～3日頃から注射部位局所にワクチン株による発赤、丘疹（善感反応）が出現するが、この反応は1週間前後で消失する。 ・SPF豚等、特に感受性の高い豚では善感反応の観察される時期に、注射部位局所以外の体表に、発赤や丘疹が発現する場合があるもので、不活化ワクチンの使用を考慮すること。この発赤や丘疹が重度で、元氣・食欲の不振、発熱がみられた場合は、適切な処置を行うこと。(参考：ワクチン株は特にベニシリン系の薬剤に感受性が高いので、体重1kg当たり約50,000単位の持続性ペニシリンを3日間注射することが一般に有効とされている。) ・生ワクチン使用農場は非使用農場よりも有意に豚丹毒による廃棄率が低いものの、慢性型丹毒症例の一部において、生ワクチン株と区別できない株が分離されたとの報告があることから、使用の際にはリスクを理解の上、必要に応じて不活化ワクチンの使用を考慮すること。	

一連 番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
2	日生研豚丹毒不 活化ワクチン	日生研	豚丹毒菌 (血清型 2) (不活化) (ア ジュバント)	5 週齢以上の豚に 1 mL ずつ 3 ～ 5 週間隔で 2 回、筋 肉内に注射する。	豚丹毒の予防	 約 2.5 か月齢の豚にワクチンを 3 週間隔で 2 回注 射し、強毒株を用いて実験感染試験を行ったと ころ、1 回目注射後、少なくとも 5 か月間は免 疫効果が持続することが確認されている。また、 移行抗体保有豚にワクチンを 3 週間隔で 2 回注 射し、実験感染試験を行ったところ、感染防御 効果が認められている。		
3	スロインテクト SER-ME	日生研	豚丹毒菌 (血清型 2) (不活化) (ア ジュバント)	3 週齢以上の豚に 1 回 0.5 mL ずつ 3 ～ 5 週間隔で 2 回、筋肉内に注射 する。	豚丹毒の予防	 約 1 か月齢の豚にワクチンを 3 週間隔で 2 回注 射し、強毒株を用いた実験感染試験を行ったと ころ、2 回目注射後、少なくとも 18 週間は防御 効果が持続することが確認されている。		
4	ポーシリス ER Y	松研 (販売は MSDAH)	豚丹毒菌 (血清型 2) 菌体抗原 (不 活化) (アジュバ ント)	ワクチンの 2 mL を 4 週齢以上の豚 に、4 週間隔で 2 回、頸部筋肉内に 注射する。	豚丹毒の予防	 4 週齢と 8 週齢で 2 回注射を行い、血清型 1 型 菌 (藤沢株) に対して 26 週齢時まで効果を示す ことが確認されている。	・注射部位を厳守すること。	
5	スロイバックス RA	共立	豚丹毒菌表面防御 抗原蛋白 (組換え 型) (アジュバン ト)	5 週齢以上の豚に 1 mL ずつ 2 ～ 4 週間隔で 2 回頸部 筋肉内に注射する。	豚丹毒の予防	 本剤を 8 週齢の豚に 2 週間隔で 2 回頸部筋肉内 に注射したところ、2 回注射後 2 週に GA 平均抗 体価及び ELISA 平均抗体価がピークを示し、初 回注射時から少なくとも 24 週間の免疫持続が確 認されている。	・注射部位を厳守すること。	
6	ポーシリス S TRESPUIS S	松研 (販売は MSDAH)	ストレプトコッカ ス・スuis (2 型 菌) (不活化) (ア ジュバント)	ワクチンの 2 mL を 2 週齢以上の豚 に、3 週間隔で 2 回、頸部筋肉内に 注射する。	ス トレプトコッカ ス・スuis血清型 2 型菌の感染によ る豚のレンサ球菌 症の発症の軽減	 2 週齢と 5 週齢にワクチン注射後、8 日目に攻 撃試験を行い、更に 20 日間観察した結果、対照 群では 5 頭中 3 頭死亡したが、試験群では死亡 例がなく、ワクチンの効果が確認されている。	・注射部位を厳守すること。	

一連 番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
7	破傷風トキソイド「日生研」	日生研	破傷風トキソイド (アジュバント)	豚の頸部皮下に2 mLを通常約2週 間の間隔で2回注 射する。	破傷風の予防	2mL 約2週間隔 2mL 免疫は約1年間持続することが確認されている。		
8	マイコバスター	科飼研	マイコプラズマ・ ハイオニューモニ エ (不活化) (ア ジュバント)	生後1週齢から8 週齢の子豚に1頭 当たり2mL、さら に2週間後から4 週間後に2mLを 筋肉内に注射す る。	豚マイコプラズマ 肺炎による肺病変 形成抑制及び増体 量・飼料効率低下 の軽減	2mL 1～8週齢 2～4週間隔 2mL 4週齢の豚に2週間隔で2回注射後、少なくとも半年間は免疫効果が持続することが確認されている。		
	日生研MPS不 活化ワクチン	日生研		3週齢以上の豚に 1mLずつ3～5 週間隔で2回、筋 肉内に注射する。	豚のマイコプラズ マ肺炎による肺病 変形成の抑制なら びに増体重抑制及 び飼料効率低下の 軽減	1mL 3週齢以上 3～5週間隔 1mL マイコプラズマ肺炎陰性の21日齢ないし38～49日齢の豚にワクチンを3あるいは5週間隔で2回筋肉内に注射し、マイコプラズマ・ハイオニューモニエ (0hp) 病原性株による実験感染試験を行なったところ、肺病変形成の抑制効果が認められている。また、31日齢の豚を用いた試験では、ワクチン2回注射後44日目あるいは92日目に行なった実験感染試験においても同様の抑制効果が認められ、ワクチンの効果は2回注射後少なくとも92日間持続することが確認されている。		
9	インゲルバック マイコフレック ス	ベーリンガー	マイコプラズマ・ ハイオニューモニ エ (不活化) (ア ジュバント)	3週齢以上の子豚 に1mLを頸部筋 肉内に1回注射す る。	豚マイコプラズマ 性肺炎による肺病 変形成抑制及び増 体量低下の軽減	1mL 3週齢以上 少なくとも26週間効果が持続することが確認されている。	・本剤は、繁殖母豚には注射しないこと。 ・アナフィラキシー反応が起った場合は、エピネフリン投与が推奨される。 ・注射部位を厳守すること。	

一連 番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
10	レスピシユア	ゾエティイス	マイコプラズマ・ ハイオニューモニ エ (不活化) (ア ジュバント)	生後1週齢から8 週齢の子豚に2 mL、さらに2週間 後に2mLを頸部 筋肉内に注射す る。	豚のマイコプラズ マ性肺炎による増 体量抑制及び飼料 効率低下の軽減	2mL ├───┐ 1～8週齢 2週間隔 2mL	・本剤と他のワクチンとの同時注射は避けること。本剤注射後3週間以内は他のワクチン注射をしないことが望ましい。 ・注射部位を厳守すること。	
	レスピシユア ワン	ゾエティイス		生後1日齢 (出生翌日) ～10週齢の子豚の頸部筋肉内に2mLを注射する。	豚のマイコプラズマ性肺炎による肺病変形成の抑制ならびに増体量抑制下の軽減	2mL ├───┐ 1日～10週齢		
11	エムパック	MSDAH	マイコプラズマ・ ハイオニューモニ エ (不活化) (ア ジュバント)	1週齢以上の子豚に1mLを2週間隔で2回、頸部筋肉内に注射する。又は、3週齢以上の子豚に2mLを1回、頸部筋肉内に注射する。	豚のマイコプラズマ性肺炎による肺病変形成の抑制ならびに増体量抑制下の軽減	1mL ├───┐ 1週齢以上 2週間隔 又は 2mL ├───┐ 3週齢以上 3週齢の豚に注射した場合、27週齢まで免疫が持続することが確認されている。	・ワクチンの注射回数は、農場の汚染状況によって選択すること。農場での汚染が少なく想定される場合に限り1回注射のスケジュールを選択すること。 ・移行抗体価の高い個体に1回注射をおこなう場合、血清抗体価の上昇が認められないことがある。 ・注射部位を厳守すること。	

一連 番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意（抜粋）	参考情報
12	エンテリゾール イリアイデイス F C エンテリゾール イリアイデイス T F	ベーリンガー ー	ローソニア トラセルラリス (生)	乾燥品を添付の溶 解用液で1頭当た り2mLになるよ うに溶解したの ち、3週齢以上の 豚に1回1頭当た り2mLを経口投 与する。又は乾 燥品を添付の溶 解用液で溶解した ち、豚の日齢に応 じた適量の飲水に 1頭当たり1頭分 となるように混 合し、3週齢以上 の豚に1回飲水投 与する。飲水投 与の場合は4時間 で飲みきる量の飲 水に混合する。	豚のローソニア イントラセルラリ ス感染症（急性出 血性腸炎型を除 く）による増体重 低下の軽減	経口 投与 2mL ├───┬─── 3週齢以上 又は 飲水 投与 1頭分※ ├───┬─── 3週齢以上 ※4時間で飲みきる量の飲水に混合する。	・本剤は、豚以外には投与しないこと。 ・本ワクチンは弱毒生菌ワクチン株であり、投与された豚から排泄される可能性がある。同居感染試験では本ワクチン株の同居感染は認められていないが、ワクチンを投与していない豚と同居させない等の飼養管理上の適切な対応を行うこと。 ・飲水投与の場合、チオ硫酸ナトリウム（ハイポ）(0.055%)又は脱脂粉乳（スキムミルク）(0.25%)を添加することにより、残留塩素を除去した後に、添付の溶解用液で溶解したワクチンを混合すること。 ・飲水投与の場合は、日齢に応じ4時間で飲みきる量の飲水にワクチンを混合すること。 ・飲水量は日齢、季節などにより異なるために、ワクチン投与前に4時間で飲みきる飲水量を確認すること。 ・飲水投与の場合、豚に均等に投与するために、全部の豚が均等に飲めるように十分な飲水器を用意すること。 ・本剤のワクチン株は薬剤の影響を受けやすいので、本剤投与前3日間及び投与後3日間はワクチン株に影響を及ぼすような薬剤の注射、経口投与又は飼料中への添加は避けること。 ・使用禁止期間（休薬期間）の長い注射薬剤で治療した豚へのワクチンの投与には、ワクチン投与前に、注射した薬剤に応じた適切な期間をあけること。 ・妊娠豚への安全性は確認されていない。	

(2) 2成分の製剤

一連番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
13	グレースーパー ター	科飼研	ヘモフィルス・パ ラスイス (血清型 2)、ヘモフィル ス・パラスイス(血 清型 5) (いずれ も不活化) (アジ ユバント)	30日齢以上の豚に 2～4週の間隔で 1回 1mLずつを 2回、筋肉内に注 射する。	ヘモフィルス・パ ラスイス血清型 2 菌及び5菌の感染 によるグレースー 病の予防	1mL ├───┬───┐ 2～4週間隔 30日齢以上 1mL		
	日生研グレースー パー病 2価ワクチ ン	日生研				1mL ├───┬───┐ 2～4週間隔 30日齢以上 30日齢の豚に用法及び用量どおりにワクチンを 注射したところ、2週後に CF 抗体価は 4 倍以上 に上昇し、2 型菌あるいは 5 型菌の実験感染試 験では発症予防効果を示した。また、その効果は、 ワクチンを 4 週間隔で 2 回注射後、少なくとも 79 日後まで持続することが確認されている。		
14	日生研 A R B P 混合不活化ワク チン ME	日生研	ボルデテラ・プロ ンキセプチカ (I 相菌) (不活化)、 パスツレラ・ムル トシダ (莢膜抗原 型 D) 皮膚壊死毒 素 (アジュバント)	妊娠豚に対し、1 回 2mL ずつを 1 ～2 か月の間隔で 2 回、筋肉内に注 射する。ただし、 2 回目の注射は分 娩予定日の 2～4 週前に行う。次回 以降の繁殖時に行 う補強注射は、2 mL をその分娩予 定日の 2～4 週間 前に 1 回、筋肉内 に行う。	ボルデテラ・プロ ンキセプチカ及び 毒素産生パスツレ ラ・ムルトシダの 混合感染、又はそ のいずれかの菌の 感染による豚の萎 縮性鼻炎の予防	初回 2mL ├───┬───┬───┐ 1～2月間隔 分娩予定日 2～4週間前 妊娠豚 次回以降 2mL ├───┬───┬───┐ 2～4週間前 分娩予定日 初産豚では 1 ないし 2 か月間隔で 2 回注射、2 産目以降では分娩の 2 又は 4 週前に 1 回追加注 射することにより、良好な抗体応答が認められ、 初乳には感染防御に有効な高値の移行抗体が確 認されている。	・ 種付予定前 10 日以内のもの、種付後 の、哺乳中のも、種付後 20 日以内及び分娩前 1 週以 内のものには、注射しない こと。 ・ 本剤は、母豚に注射し、 その子豚が免疫母豚の初乳 を飲むことで予防効果が発 揮される。免疫母豚が十分 量の初乳を分泌しているか どうか、また初乳を飲んで いない子豚がいないかどう か確認すること。	

一連 番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意（抜粋）	参考情報
15	スライムジェン ART 2	KMB	ボルデテラ・ブロンキセプチカ皮膚壊死毒素素（組換え型）、パスツレラ・ムルトシダ皮膚壊死毒素素（組換え型）（アジュバント）	妊娠豚に対し、2 mL 分娩前 5 ～ 6 週及び 2 週間後の 2 回筋肉内に注射する。次の分娩からは 2 mL を分娩前 2 週間後の 1 回、筋肉内に注射する。子豚（1 か月齢以上）には、1 mL を 2 回、3 ～ 4 週間隔で筋肉内に注射する。	ボルデテラ・ブロンキセプチカ及び毒素素産生パスツレラ・ムルトシダの混合感染、又はそのいずれかの菌の感染による豚の萎縮性鼻炎の予防	初回 2mL 5～6週間前 2週間前 分娩予定日 妊娠豚 次回以降 2mL 2週間前 分娩予定日 本剤を母豚に注射した場合、子豚の移行抗体価はボルデテラ・ブロンキセプチカ、パスツレラ・ムルトシダいずれも 3 か月齢前後まで持続することが確認されている。 1mL 1 か月齢以上 3～4週間隔 1mL 本剤を 5 ～ 6 週齢の抗体陰性豚に 4 週間隔で 2 回注射したとき、2 回目注射後 4 週目には最小有効抗体価に達し、少なくとも 17 週目まで持続することが確認されている。	・母子免疫の目的で本剤を母豚に使用する際は、子豚が免疫母豚の初乳を飲むことで予防効果が発揮される。免疫母豚が十分量の初乳を分泌しているかどうか、また、初乳を飲んでいない子豚がいないかどうかを確認すること。	

(3) 3成分の製剤

一連番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
16	アラデイクエータ ー	ゾエティイス	ボルデテラ・ブロンキセプチカ (I相菌) (不活化)、パスツレラ・ムルトシダ (莢膜抗原型D) (不活化)、パスツレラ・ムルトシダ (莢膜抗原型D)壊死毒素(アジュバント)	妊娠豚に対し、1回 2mLずつを分娩予定日の6及び2週間前に注射する。次回以降の繁殖時に行う補強注射は、2mLをその分娩予定日の2週間前に1回、頸部筋肉内に行う。	ボルデテラ・ブロンキセプチカ並びに毒素産生パスツレラ・ムルトシダ(A及びD型)の感染による産子における豚萎縮性鼻炎の予防	初回 2mL 6週間前 2mL 2週間前 分娩予定日 妊娠豚 次回以降 2mL 2週間前 分娩予定日	・本剤と他のワクチンとの同時注射は避けること。本剤注射後3週間以内は他のワクチンを注射しないことが望ましい。 ・本剤は、妊娠豚に注射し、子豚が免疫母豚の初乳を飲むことで予防効果が発揮される。免疫母豚が十分量の初乳を分泌しているかどうか、また初乳を飲んでいない子豚がいなかどうか確認すること。 ・注射部位を厳守すること。	
17	日生研 A R B P・豚丹毒混合 不活化ワクチン	日生研	ボルデテラ・ブロンキセプチカ (I相菌) (不活化)、パスツレラ・ムルトシダ (莢膜抗原型D) 皮膚壊死毒素、豚丹毒菌 (血清型2) (不活化) (アジュバント)	・妊娠豚に用いる場合 1回 5mLずつを1～2か月の間隔で2回、筋肉内に注射する。ただし、2回目の注射は分娩予定日の約1か月前に行う。 ・子豚に用いる場合 5週間以上の子豚に1回 1mLずつを3～5週間隔で2回、筋肉内に注射する。	ボルデテラ・ブロンキセプチカ並びに毒素産生パスツレラ・ムルトシダの感染による豚の萎縮性鼻炎 (A R) 及び豚丹毒の予防	妊娠豚 5mL 約2～3か月前 5mL 約1か月前 1mL 5週間以上 3～5週間隔 1mL 5週間以上 分娩予定日 5週間以上の豚に用法及び用量どおりにワクチンを注射したところ、ボルデテラ・ブロンキセプチカ (Bb) 凝集抗体及びパスツレラ・ムルトシダ・トキソイド (Pm-T) ELISA 抗体の良好な抗体上昇が認められている。また、豚丹毒菌を実験的に感染させたところ、発症防御効果が認められた。ワクチン注射後 Bb に対し有効な免疫は18週、Pm-T に対し有効な免疫は10週、豚丹毒菌に有効な免疫は19週まで持続することが確認されている。	・種付予定前10日以内のもの、種付け後20日以内及び分娩前20日以内のものには、注射しないこと。	

一連 番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意（抜粋）	参考情報
18	スワイバックス ンポBPE	共立	ボルデテラ・ブロンキセプチカ赤血球凝集素、パストレル・ムルトシダ皮膚壊死毒素、豚丹毒菌表層防御蛋白（アジュバント）	妊娠豚に対し、1回1mLずつを4週間隔で2回頸部筋肉内に注射する。ただし、2回目の注射は分娩予定日の約1か月前までに注射し、前回注射部位の反対側に注射する。次回以降の繁殖時に行う追加注射は、1mLをその分娩予定日の1か月前までに1回注射する。	ボルデテラ・ブロンキセプチカ及び毒素産生パストレル・ムルトシダの感染による豚の萎縮性鼻炎の予防並びに豚丹毒の予防	初回 約2か月前 1mL 約1か月前 1mL 分娩予定日 妊娠豚 次回以降 約1か月前 1mL 分娩予定日	・交配後間がないもの及び分娩前30日以内の妊娠豚には注射しないこと。 ・本剤は、母豚に注射し、その子豚が免疫母豚の初乳を飲むことで予防効果が発揮される。免疫母豚が十分な初乳を分泌しているか、また、子豚が初乳を確実に摂取しているかを確認すること。 ・注射部位を厳守すること。	
19	スライムジェン ART2/ER	KMB	ボルデテラ・ブロンキセプチカ皮膚壊死毒素（組換え型）、パストレル・ムルトシダ皮膚壊死毒素（組換え型）、豚丹毒菌表層防御抗原（組換え型）（アジュバント）	妊娠豚に対し、2mL分娩前5～6週及び2週間後の2回筋肉内に注射する。次回分娩からは2mLを分娩前2週間後の1回、筋肉内に注射する。子豚（1か月齢以上）には、1mLを2回、3～4週間隔で筋肉内に注射する。	豚丹毒の予防並びにボルデテラ・ブロンキセプチカ及び毒素産生パストレル・ムルトシダの混合感染又はそのいずれかの菌の感染による豚の萎縮性鼻炎の予防	初回 5～6週間前 2mL 2週間前 2mL 分娩予定日 妊娠豚 次回以降 2週間前 2mL 分娩予定日 本剤を母豚に注射した場合、子豚の移行抗体価はボルデテラ・ブロンキセプチカ、パストレル・ムルトシダいずれも3か月齢前後まで持続することが確認されている。 1mL 3～4週間隔 1mL 1か月齢以上 本剤を5～6週齢の抗体陰性豚に4週間隔で2回注射したとき、2回目注射後4週目には最小有効抗体価に達し、少なくとも16週目まで持続（することが確認されている）。	・母子免疫の目的で本剤を母豚に使用する際は、子豚が免疫母豚の初乳を飲むことで予防効果が発揮される。免疫母豚が十分な初乳を分泌しているかどうか、また、初乳を飲んでいない子豚がいないかどうかを確認すること。	

一連 番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
20	マイコバスター ARプラス	科飼研	ボルデテラ・ブロンキセプチカ破砕上清 (皮膚壊死毒素)、パスツレラ・ムルトシダトキソイド、マイコプラズマ・ハイオニューモニエ (不活化) (アジュバント)	生後1週齢から4週齢の子豚に1頭当たり1mL、さらに2週間後から4週間に1mLを筋肉内に注射する。	豚の萎縮性鼻炎の予防及び豚肺炎による肺病変形成抑制及び増体量・飼料効率低下の軽減	 4週齢の豚に2週間隔で2回注射後、ボルデテラ・ブロンキセプチカに対しては少なくとも18週齢まで、パスツレラ・ムルトシダとマイコプラズマ・ハイオニューモニエに対しては少なくとも25週齢まで、免疫効果が持続することが確認されている。		

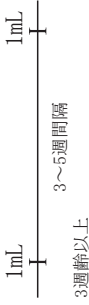
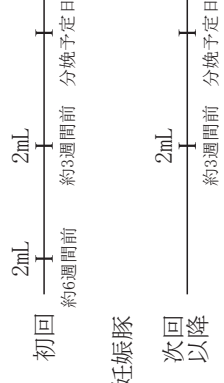
(4) 4成分の製剤

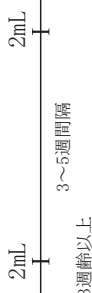
一連 番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
21	ポ－シリス A P P－N	松研 (販売はMSDAH)	ア ク チ ノ バ シ ラ ス ・ プ ル ロ ニ ュ ー モ ニ エ A p x I ト キ ソ イ ド、ア ク チ ノ バ シ ラ ス ・ プ ル ロ ニ ュ ー モ ニ エ A p x II ト キ ソ イ ド、ア ク チ ノ バ シ ラ ス ・ プ ル ロ ニ ュ ー モ ニ エ A p x III ト キ ソ イ ド、ア ク チ ノ バ シ ラ ス ・ プ ル ロ ニ ュ ー モ ニ エ 菌 体 外 膜 蛋 白 (O M P) (ア ジ ュ バ シ ャ ン ト)	ワ ク チ ン の 2mL を 6 週 齢 以 上 の 豚 に 4 週 間 隔 で 2 回、頸部筋肉内に 注射する。	豚のア ク チ ノ バ シ ラ ス ・ プ ル ロ ニ ュ ー モ ニ エ 血 清 型 1、2、5、7、 10 型 菌 感 染 症 (胸 膜 肺 炎) の 発 症 防 御	2mL ―― 4週間隔 2mL ―― 6週齢以上	・注射部位を厳守すること。	
22	“京都微研”ピ ッグウイン－E A	京都微研	豚丹毒菌抽出抗 原、ア ク チ ノ バ シ ラ ス ・ プ ル ロ ニ ュ ー モ ニ エ (血 清 型 1)、ア ク チ ノ バ シ ラ ス ・ プ ル ロ ニ ュ ー モ ニ エ (血 清 型 2)、ア ク チ ノ バ シ ラ ス ・ プ ル ロ ニ ュ ー モ ニ エ (血 清 型 5 a) (い ず れ も 不 活 化) (ア ジ ュ バ シ ャ ン ト)	約30～50日齢豚の 耳根部後方頸部筋 肉内に1mL注射 する。その後90日 齢までに約30～60 日間隔で反対側の 耳根部後方頸部筋 肉内に1mL注射 する。	豚丹毒及び豚のア ク チ ノ バ シ ラ ス ・ プ ル ロ ニ ュ ー モ ニ エ 血 清 型 1、2、 5 型 菌 感 染 症 の 予 防	1mL ―― 30～60日間隔 ※ 約30～50日齢 ※第2回注射は90日齢まで	・注射部位を厳守すること。	

本剤の対象病原体に対する抗体陰性の約30日齢の豚10頭に、本剤を1か月間隔で2回、耳根部後方頸部筋肉内に注射し、第2回注射後4か月目に豚丹毒菌藤沢株、ア ク チ ノ バ シ ラ ス ・ プ ル ロ ニ ュ ー モ ニ エ (APP) Y-1 株 (血 清 型 1 型)、APP G-4 株 (血 清 型 2 型) 及び APP E-3 株 (血 清 型 5a 型) による攻撃試験を実施した。攻撃時の各病原体に対する抗体価は、いずれも有効抗体価以上を維持しており、攻撃後も臨床異常は認められていない。また、攻撃試験終了後の各臓器より攻撃菌が分離されなかったことから、第2回注射後4か月間は本剤の有効性が持続することが確認されている。

(5) 6 成分の製剤

一連 番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
23	日生研豚A P ワ クチン1 2 5 R X	日生研	ア ク チ ノ バ シ ラ ス ・ プ ル ロ ニ ュ ー モ ニ エ (血 清 型 1) 、 ア ク チ ノ バ シ ラ ス ・ プ ル ロ ニ ュ ー モ ニ エ (血 清 型 2) 、 ア ク チ ノ バ シ ラ ス ・ プ ル ロ ニ ュ ー モ ニ エ (血 清 型 5) (い ず れ も 不 活 化) 、 ア ク チ ノ バ シ ラ ス ・ プ ル ロ ニ ュ ー モ ニ エ r A p x I タ ン パ ク 、 ア ク チ ノ バ シ ラ ス ・ プ ル ロ ニ ュ ー モ ニ エ r A p x II タ ン パ ク 、 ア ク チ ノ バ シ ラ ス ・ プ ル ロ ニ ュ ー モ ニ エ r A p x III タ ン パ ク (い ず れ も 組 換 え 型) (ア ジ ュ バ ン ト)	35日齢以上の豚に 3 ～ 5 週間隔で1 回 1 mL ずつを 2 回、頸部筋肉内に 注射する。	豚のアクチノバシ ラス・プルロニー ーモニーエ血清型 1、2及び5菌感 染症の予防	1mL 35日齢以上 3～5週間隔 1mL 35日齢の豚に3 週間隔で2 回ワクチンを注射し、 2 週後にアクチノバシラス・プルロニーモニ エ (App) 1 型菌、2 型菌及び5 型菌の病原性株 を用いて実験感染試験を行ったところ、肺病変 スコアの低減効果が認められている。また、40 日齢の豚に4 週間隔で2 回ワクチンを注射し、 8 週後に同様に実験感染試験を行った場合にも 同様の肺病変抑制効果が認められ、免疫効果の 持続が確認されている。	•注射部位を厳守すること。	

一連 番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意（抜粋）	参考情報
24	スワインデクト APX-ME	日生研	アクチノバシラス・プルロニエモニエ（血清型1）、アクチノバシラス・プルロニエモニエ（血清型2）、アクチノバシラス・プルロニエモニエ（血清型5）（いずれも不活化）、アクチノバシラス・プルロニエモニエ rAp x I タンパク、アクチノバシラス・プルロニエモニエ rAp x II タンパク、アクチノバシラス・プルロニエモニエ rAp x III タンパク（いずれも組換え型）（アジュバメント）	3 週齢以上の豚に 3 ～ 5 週間隔で 1 回 1 mL ずつを 2 回、頸部筋肉内に注射する。	豚のアクチノバシラス・プルロニエモニエ 1、2 及び 5 菌感染症の予防	 5～6 週齢の豚にワクチンを3週間隔で2回筋肉内注射し、アクチノバシラス・プルロニエモニエ（App）各型菌を用いて実験感染試験を行ったところ、いずれの菌に対しても防衛効果を示した。この効果はワクチンを5週間隔で2回筋肉内注射した場合にも同様に認められている。また、実験感染試験により、ワクチンによる免疫効果は2回注射後少なくとも12週間持続することが確認されている。	・注射部位を厳守すること。	
25	リターガード T-C	ゾエティス	大腸菌 K88線毛抗原、大腸菌 987P線毛抗原、大腸菌 F41線毛抗原、大腸菌エンテロトキシン B（不活化）、クロストリジウム・パーフリンゲンSC型β毒素トキソイド（アジュバント）	妊娠豚の頸部筋肉内に 2 mL 注射する。分娩の約 6 週間前に初回注射を行い、3 週間後に2回目の注射を行う。次回の妊娠からは分娩の約 3 週間前に 1 回注射を行う。	哺乳豚の K88、K99、987P、F41線毛抗原及び易熱性エンテロトキシンによる産生大腸菌による下痢並びにクロストリジウム・パーフリンゲンSC型菌による壊死性腸炎の予防	 初回 2mL 約6週間前 分娩予定日 妊娠豚 次回以降 2mL 約3週間前 分娩予定日	・本剤と他のワクチンとの同時注射は避けること。本剤注射後3 週間以内は他のワクチンを注射しないことが望ましい。 ・本剤は、妊娠豚に注射し、哺乳豚が免疫母豚の初乳を飲むことで予防効果が発揮されるため、免疫母豚が十分量の初乳を分泌しているか、また、初乳を飲んでいない哺乳豚がいはいか確認すること。 ・注射部位を厳守すること。	

一連 番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
26	日生研豚A P M 不活化ワクチン	日生研	アクチノバシラ ス・プルロニエ モニエ (血清型 1)、アクチノバ シラス・プルロ ニエモニエ (血 清型2)、アクチ ノバシラス・プ ルロニエ (血 清型5) (いずれ も不活化)、アク チノバシラス・プ ルロニエモニエ r A p x I タンパ ク、アクチノバシ ラス・プルロニエ モニエ r A p x II タンパク、アク チノバシラス・プ ルロニエモニエ r A p x III タンパ ク (いずれも組換 え型)、マイコプラ ズマ・ハイオニ エモニエ (不活 化) (アジュバン ト)	3 週齢以上の豚に 3 ～ 5 週間隔で 1 回 2 mL ずつを 2 回、筋肉内に注射 する。	豚のアクチノバシ ラス・プルロニエ モニエ血清型 1、2 及び 5 菌感 染症の予防ならび に豚のマイコプラ ズマ肺炎による肺 病変形成の抑制な らびに増体重抑制 及び飼料効率低下 の軽減	 アクチノバシラス・プルロニエモニエ (App) 陰性の 3 週齢の豚に 3 週間隔で 2 回 ワクチンを注射し、2 回注射後 2 週に App2 型菌の病原性株を用いて実験感染試験を行ったところ、肺病変スコアの低減効果が認められている。また、マイコプラズマ・ハイオニエモニエ (Mhp) 陰性の 3 週齢の豚に 3 週間隔で 2 回 ワクチンを注射し、2 回注射後 2 週に Mhp 病原性株による実験感染試験を行ったところ、肺病変形成の抑制効果が認められている。App 及び Mhp 陰性の 6 週齢の豚に 4 週間隔で 2 回 ワクチンを注射し、2 回注射後 8 週に同様な実験感染試験を行った場合にも肺病変抑制効果が認められ、ワクチンの効果は少なくとも 2 回注射後 8 週まで持続することが確認されている。		

2-3 ウイルス・細菌の混合ワクチン

(1) 2成分の製剤

一連番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意（抜粋）	参考情報
1	フォステラメ タステイムPC V-MH	ゾエテイス	豚サ－コウウイルス (1型－2型キメラ)、マイコプラズマ・ハイオニューモニエ（いずれも不活化）（アジュバント）	本剤2mLを3週齢以上の豚の頸部筋肉内に注射する。	豚サ－コウウイルス2型感染に起因する増体量抑制の軽減、並びにウイルス血症及びウイルス排泄の低減。 豚マイコプラズマ性肺炎による肺病変形成の抑制及び増体量抑制の軽減、並びに飼料要求率の改善。	2mL ―― 3週齢以上	・繁殖に供している雌豚には注射しないこと。 ・注射部位を厳守すること。	

(2) 3 成分の製剤

一連 番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意 (抜粋)	参考情報
3	フルッシュア E R	ゾエティス	豚インフルエンザ ウイルス A 型 (2 株)・豚丹毒菌 (い ずれも不活化) (ア ジュババント)	乾燥ワクチンを液 状ワクチンで完全 に溶解し、その 2 mL を 6 週 齢 以 上 の健康な豚の頸部 筋肉内に 3 週間の 間隔で 2 回注射す る。	豚インフルエンザ の発症防御及び豚 丹毒の予防		・本剤は妊娠豚には注射しないこと。 ・本剤と他のワクチンとの同時注射は避けること。本剤注射後 3 週間以内は他のワクチンを注射しないことが望ましい。 ・注射部位を厳守すること。	

一連 番号	製品名	製造販売業者名 (略称)	有効成分名	用法・用量	効能・効果	接種プログラム	使用上の注意（抜粋）	参考情報
4	インゲルバックス 3フレックス	ベーリンガー	豚サークコウウイルス (2型・組換え型)、 マイコプラズマ・ ハイオニエ・モニ エ (いずれも不活 化)、豚繁殖・呼 吸障害症候群ウイ ルス (生) (アジ ユバント)	豚サークコウウイルス 2 型不活化抗原、マイ コプラズマ・ハイオ ニエ・モニエ不活 化抗原及び豚繁殖・呼 吸障害症候群ウイ ルス乾燥抗原のそれ ぞれ全量を混合した ものの 2mL を、3 ～ 5 週齢の子豚の頸部 筋肉内に 1 回注射す る。 マイコプラズマ・ハイ オニエ・モニエ不活 化抗原がヘッドスベ ース容器の製品で は、添付の連結針を 用いて、豚サークウ イルス 2 型不活化抗 原の全量をマイコプラ ズマ・ハイオニエ ・モニエ不活化抗原 に注入し混合した 後、その全量を豚繁 殖・呼吸障害症候群 ウイルス乾燥抗原に 注入し混合する。 マイコプラズマ・ハイ オニエ・モニエ不活 化抗原がヘッドスベ ースなし容器の製品 では、滅菌済の注射 器を用いて豚サーク ウイルス 2 型不活化 抗原及びマイコプラ ズマ・ハイオニエ・ モニエ不活化抗原の それぞれ全量を吸引 し、両抗原の総量以 上の容量の滅菌済混 合用容器にそれぞれ 全量を注入し混合し た後、その全量を豚 繁殖・呼吸障害症候 群ウイルス乾燥抗原 に注入し混合する。	豚サークコウウイルス 2 型感染に起因す る死亡率の改善、 発育不良豚の発生 率の低減、増体量 の低下の改善、臨 床症状の改善及び ウイルス血症発生 率の低減。豚マイ コプラズマ性肺炎 による肺病変形成 抑制及び増体量低 下の軽減。豚繁殖・ 呼吸障害症候群ウ イルス感染による 子豚の生産阻害の 軽減。	2mL ―― ―― 3～5週齢	・適切に抗原を混合するため使 用説明書をよく読むこと。 ・繁殖用雌豚及び繁殖用雄豚に は注射しないこと。 ・ PRRS 陰性農場では使用し ないこと。 ・注射対象となる健康な子豚全 頭に一斉に注射すること。 ・ PRRS 汚染農場に PRRS 陰性豚を導入する際にワクチン を注射する場合、PRRS ワク チン株が他の豚へ伝播する機会 を減少させるために、ワクチン を注射した豚を接種後 6 週間は 隔離して飼育すること。 ・ PRRS ワクチンウイルスは注 射豚から排泄され水平感染する 場合があるので、ワクチンウイル スが伝播しないように注射豚(群) の飼育管理には注意すること。 ・野外 PRRS ウイルスが体内 で増殖している豚にワクチン注 射した場合、PRRS ワクチン 株と野外ウイルスの組換えが起 こる可能性が否定できない。 ・本剤を幼若な豚に注射する場合、 母子免疫の影響を受けてワクチン 効果が抑制されることがある。 ・過敏な体質の豚では、注射後 短時間内でアナフィラキシー様 反応を呈する場合がある。アナ フィラキシー反応が起こった場 合は、エピネフリン投与が推奨 される。 ・本剤は、他のワクチンとの同時 投与は避けること。また、本剤注 射後 3 週間以内は他のワクチンを 投与しないことが望ましい。 ・注射部位を厳守すること。	

表 ワクチン一覧におけるワクチンと含有するウイルス・細菌の名称一覧

製品名	ページ	ウイルス名										細菌名									
		日本脳炎ウイルス	豚パルボウイルス	豚ゲタウイルス	オースキー病ウイルス	豚繁殖・呼吸障害症候群ウイルス	豚流行性下痢ウイルス	豚伝染性胃腸炎ウイルス	豚サイコウイルス2型	豚インフルエンザウイルス	豚丹毒菌	パスツレラ・ムルトシダ	ボルデテラ・ブロンキセプチカ	マイコプラズマ・ハイオニューモニエ	アクチノバシラス・フルロニニューモニエ	大腸菌	クロストリジウム・パーフリンゲンス	ストレプトコッカス・スイス	破傷風菌	ヘモフィルス・パライス	ローソニア イントラセルラリス
(2-1 ウイルスワクチン)																					
日生研日本脳炎生ワクチン	5	○																			
“京都微研”日本脳炎ワクチン	5	○																			
動物用日脳TCワクチン「KMB」	6	○																			
日生研日本脳炎TC不活化ワクチン	6	○																			
“京都微研”日本脳炎ワクチン・K	6	○																			
豚パルボ生ワクチン「KMB」	10		○																		
豚パルボワクチン「KMB」	10		○																		
“京都微研”豚パルボワクチン・K	10		○																		
日本脳炎・豚パルボ混合生ワクチン「KMB」	13	○	○																		
“京都微研”日本脳炎・豚パルボ混合生ワクチン	13	○	○																		
“京都微研”豚死産3種混合生ワクチン	15	○	○	○																	
スパキシノーエスキー	7				○																
ボーシリス Begonia DF・10	7				○																
ボーシリス Begonia DF・50	7				○																
フォステラPRRS	11				○																
インゲルバック PRRS生ワクチン	11				○																
スワインテクトPRRS-ME	12				○																
日生研PED生ワクチン	12						○														
スィムジェンTGE/PED	14						○	○													
日生研TGE・PED混合生ワクチン	14						○	○													
フォステラメタスティムPCV	8								○												
インゲルバック サーコフレックス	8								○												
ボーシリスPCV	8								○												
サーコバック	9								○												
“京都微研”豚インフルエンザワクチン	13									○											
(2-2 細菌等ワクチン)																					
豚丹毒生ワクチン「科飼研」	16										○										
日生研豚丹毒生ワクチンC	16										○										
豚丹毒生ワクチン「KMB」	16										○										
日生研豚丹毒不活化ワクチン	17										○										
スワインテクトSER-ME	17										○										
ボーシリスERY	17										○										
スワイバックERA	17										○										
日生研ARBP・豚丹毒混合不活化ワクチン	23										○	○	○								
スワイバックコンボBPE	24										○	○	○								
スィムジェンrART2/ER	24										○	○	○								
日生研ARBP混合不活化ワクチンME	21										○	○	○								
スィムジェンrART2	22										○	○	○								
アラディケーター	23										○	○	○								
マイコバスターARプラス	25										○	○		○							
マイコバスター	18													○							
日生研MPS不活化ワクチン	18													○							
インゲルバック マイコフレックス	18													○							
レスビシュア	19													○							
レスビシュアワン	19													○							
エムバック	19													○							
日生研豚APM不活化ワクチン	29													○	○						
“京都微研”ビッグウイン-EA	26										○				○						
ボーシリスAPP-N	26													○							
日生研豚APワクチン125RX	27													○							
スワインテクトAPX-ME	28													○							
リターガードLT-C	28															○	○				
ボーシリスSTREPSUIS	17																	○			
破傷風トキソイド「日生研」	18																		○		
グレーサーバスター	21																			○	
日生研グレーサー病2価ワクチン	21																			○	
エンテリゾール イリアイティス FC	20																				○
エンテリゾール イリアイティス TF	20																				○
(2-3 ウイルス・細菌の混合ワクチン)																					
フォステラメタスティムPCV-MH	30								○					○							
インゲルバック フレックスコンボ ミックス	31								○					○							
インゲルバック 3フレックス	33				○			○						○							
フルジュアER	32								○	○											

動物用ワクチン等保管協議会

協議会幹事団体：公益社団法人日本動物用医薬品協会

〒103-0023 東京都中央区日本橋本町4-6-10 サトービル6階
TEL 03-5204-0440